

同僚代表謝辞

鈴木直次

ただいま同僚代表という御紹介を頂きました。しかし私のような若輩のものが謝辞を申しあげるといのは大変僭越なのですが、先生の御専攻に最も近い後学のひとりとして、本日は西田先生の御略歴、お仕事の内容などを御紹介し、謝辞にかえさせて頂きたいと思ひます。

先生は昭和9年、1934年に現在の京都大学に入学され、4年後の昭和13年（1938年）に卒業されています。御承知のようにこの時代は、わが国が世界恐慌の中から第二次世界大戦へとむかっていったころにあたります。言論や思想に対する統制が強まる一方、それに対するさまざまな抵抗運動が展開され、やがてその息の根が完全に止められてゆく、そういう時代に大学生生活を送られたわけであります。時代の流れに敏感であった当時の多くの大学生と同様に、先生もまた京大時代にこのような運動に加わられたのですが、それは一種の文化運動として、今日でも必ずしも正当に評価されているとはいえないけれども日本では例をみない人民戦線の色彩を帯びた運動であったと伺っています。具体的には、『学生評論』という雑誌の編集にあたられ、同時に当時の一流紙であった大阪毎日新聞京都版の「カレッジ・セクション」をも編集されました。前者の雑誌は当時の京都のいわゆる知識人を主体とする文化誌であり、最近、復刻版が出されました。また後者には堅い読物、座談会ばかりでなく、現在のキャンパス誌のはしりのような「全国キャンパス紹介」なども掲載されています。これらは当時の社会運動に関心をもつ人々によって第一級の資料として評価され、研究されつつあります。「カレッジ・セクション」を実際にお読みになった本学の栗木先生のお話ですと、西田先生がお書きになった記事の中には、現在の先生からは信じられないような柔かいものがあつたそうであります。先生が一員であつたこの京都の文化運動は、広がりとそのリベラルさのゆえに当時のわが国の抵抗運動全体の中でもきわだった特徴をもっていますが、それはまた西田先生御自身のその後のお仕事にも色こく影をおとしているように思われます。京大卒業以後先生は、民間の二、三の研究所あるいは大蔵省関係のお仕事を經たのち、昭和24年（1949年）に本学へ入職されました。その後、多数の要職を經られ、今日に至られたわけであります。

西田先生のお仕事は、大別するとつぎの2つにわけることができます。その第1は、マルクス経済学をバックグラウンドにアメリカ経済を中心とする国際経済関係の御研究であり、第2にはマルクス主義、とりわけ、ブハーリンやトロツキーなどいわゆる「非正統派マルクス主義」

の研究にありました。まず最初のアメリカおよび国際経済関係のお仕事の特徴は、歴史から現代までに至るきわめて広い時期をカバーされ、また広い分野にわたって該博な知識をお示しになっておられることにあります。それがよくあらわれているのは、アメリカの植民地時代の経済発展からほぼ現代までを扱った2つの論文（「1600年前後の北アメリカのイギリス植民地にあらわれた飢餓的従属的近代的原始共産制」「イギリスとアメリカ——最初の300年」）ではないかと思います。とくに前者の論文の中では、初期アメリカにおける植民地が当初は原始共産制でありながら、それが農業生産力をあげる必要のため徐々に解体され、やがて強固な指令経済へと移ってゆくという筋道を示しておられます。また、「アメリカの対外経済政策の変遷」という論文では、戦後のアメリカの対外経済政策が簡潔にまとめられているのですが、その中でアメリカの目的が日欧の復興、低開発国の経済発展そしてより自由な貿易制度をつくりあげることにあったこと、しかしそれがアメリカ国内および海外の民族主義、国益主義者によって阻害され、結局は第1の目的を達成したにとどまったことを論じられていられます。これらは現代の国際関係を考えるうえでも示唆的ではないかと思います。またマルクス経済学をバックグラウンドになさりながら、同時に先生はドグマとは無縁であり、非常に柔軟な現実感覚を示されています。それは、おそらく当時としてはあまり注目されることのなかったであろうアメリカの失業統計の吟味や国民経済計算——家計基準などを取扱われた論文にうかがうことができます。

アメリカ研究としては主要ではありませんが、重要なお仕事のひとつに古典的な業績の一連の翻訳がおありになります。『現代の独占資本』（レーバー・リサーチ・アソシエーション）や『アメリカの支配者』（アンナ・ロチェスター）などがこれであり、とくに後者は、1920年代を中心とするアメリカの金融資本を分析した代表的な業績のひとつとして、今日でもしばしば研究者によって引用されている書物です。私も大学院時代にあるセミナーでこれを読んで、報告をさせられたことがありますが、訳者が「立井海洋」——後に「絶て胃潰瘍」に因む先生のペン・ネームであることを教えられたのですが——とあったものですから、西田先生のお仕事とはしばらく気づきませんでした。この本の内容はそれほどよく憶えているとはいえないのですが、今でも印象に残っているのは訳文のみごとさです。大変読みやすくわかりやすい日本語であり、また独得の歯切れのよいスタイルをもっていました。これは先生の他の御翻訳にも共通しているように思います。

先生のもうひとつのお仕事はマルクス主義に関するものであります。先生は貨幣論に関するいくつかの論文をお書きになっていますが、これと並んで重要なのはブハーリンやトロツキーなどいわば非正統派マルクス主義者の著作を翻訳、紹介なさっていることです。これまた私事

になります。私共の大学生の時代にはこうした諸理論を再評価する動きがありましたが、先生のお仕事はこのような再評価にとって重要な役割を果たされたように思われます。ある機会にこのお仕事について伺うと、先生は、自分はトロツキーに賛成なわけではないが、翻訳してちゃんと言語にしておくだけの必要はある文献だ、とおっしゃったことを記憶しています。それは、京都で培われた先生の「リベラル」さのあらわれではなかったかと思えます。

先生は本学で長期にわたってゼミをもたれ、多数の学生を育ててこられました。いつか先生のゼミの論文集を拝見したことがあったのですが、その中で先生はゼミナリス滕の希望で吉本隆明の本をはじめ本格的に読んだ、しかし、自分では納得できないとしてその吉本ファンの学生に論争を挑まれる文章を寄せられていたことがあったと記憶しております。入職後間もない私にとっては、先生のこのような柔軟さは驚きでありましたし、今でも、私が先生の御年齢に達したときそのようなことができるかどうか、不安がないわけではありません。

先生は数年前に眼をお悪くされ、手術を受けられるなど御健康にすぐれなかったと伺いましたが、最近では回復され、お元気に海外へもお出かけになっていらっしゃるようです。どうぞ今後とも御健康にくれぐれも留意され、お仕事を続けられますよう。長い間、ありがとうございました。